



プラトン『メノン』研究：  
アナムネーシスとティア・モイラ

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2011-12-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 金松, 賢諒 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.24729/00006688">https://doi.org/10.24729/00006688</a>

# プラトンの『メノン』研究

— アナムネーシスとテイア・モイラ —

金 松 賢 諒

わたくしは前論文「ソープロシユネー論—プラトン『カルミデス』を拠典として—」（『鈴木大拙博士頌壽記念論文集』所載）において、わたくしの平常の問題、「自己を知ること」「自知（自覚）」の何であるかを探究して、プラトン青年期の作品『カルミデス』〔慎みについて〕を考察し、そこに自知と善の知との一致の暗示を見たのであるが、プラトン中期の作品で、アカデメイア学園設立趣意書とも言われる『メノン』の徳論において、この「自知」の深い根拠づけがなされていると思うので、当編によって徳（*areté*）の何であるかを究明して見たいと思う。

## 一 徳のイデアの探究（70a—80d）

徳は教えられるものか。それとも教えられず、むしろ修練されるものか。それとも、修練されもせず、学ばれもせず、自然に（「生れつき」）、または他の仕方で、人間に具わるのか。テッサリアの青年政治家メノン——ソフィスト・ゴルギアスの弟子——のこの問いに答えてソクラテスは、此処アテナイでは知恵のいわば早魘が起っている。知恵は此処からテッサリア——ゴルギアスの滞在地——に移住してしまつたようである。アテナイ人は誰も、徳が教えられるか否かを知らないどころか、徳とはいったい何であるかをさえも知らない。自分も同様で、この点ではアテナイ市民と貧しさを共にする。と言っているが、この言葉は、実際に徳の何たるやを知らず、無知から行動しているアテナイの政治家たち——ソクラテスの告訴者アニトスはその代

表者〔後出〕——に向けられていると共に、他方、全く別な仕方ではあるがやはりそれを知らないところの、知れる無知者としてのソクラテス自身にも向けられているのである。

さてソクラテスが、徳の何であるかを自ら知らないのみならず、それを知っている人に会ったこともない、と言うので、メノンは、ゴルギアスが此処に滞在していたときにお会いにならなかつたのか、とたずねる。するとソクラテスは、会ったけれども、徳についてかれが知っていると思われたかどうか、自分はおぼえが悪いので、今はおぼえてはいない。と言って、だからメノンが想起させてはくれまいか、ゴルギアスがどう言つたか。いやむしろ、徳が何であるかを言ってもらいたい、ゴルギアスに代つて、同意見のメノンに。とうながす。そこでメノンは易々とそれを引き受ける。しかし、徳の何であるか、すなわち、徳の有性〔本質〕をではなく、徳の種々相——男の徳、

女の徳、子供の徳、奴隷の徳等——を列挙して、正しい答だと思つて  
 いるので、ソクラテスは、それらの種々の徳は、徳で有るという点で  
 は異なるのではないだから、すべての徳が徳で有るゆえんの一なる同じ  
 形相を見つめて答えるようにながす。(71e-72d)

するとメノンは、徳とは人間を支配することができることだ(80e)、  
 と答える。しかしこの答は普遍妥当性を欠く。例えば、奴隷が主人の  
 支配者となることは奴隷の徳ではない。支配者はもはや奴隷ではない  
 から。また正しく支配するのでなければ、徳ではない。そこでメノン  
 は、正しさが徳である、と答えるが、ソクラテスに、例えば、円は形  
 ではなく或る形であつて、他にも種々の形がある、と言われて、正し  
 さも或る徳であることを認め、他の種々の徳——勇敢、慎慮、知恵、  
 大度等——を挙げる。一を求めて、再び多に達したわけである。

そこで、ソクラテスはメノンと有性問答の練習をする。例えば、形  
 とは何であるか、と問われて、形とは色に従うものである、と答えた  
 として、もし問者が、色を知らない、と言えば如何。そのときは、  
 争論家のようにつばねずに、友として親切に對話的に答えな  
 ければならない。對話的とは、真実を答えるのみならず、相手が知っ  
 ていると同意するところの事柄をもって答えることである(75d)。  
 そこでソクラテスは、その例証として、限定、面、立体等をメノン  
 が知っていることを確かめたくて、形とは立体の限定である(76a)、  
 と答えて見せる。

かかる練習を経たのち、メノンは、再び徳の有性問題に立ちかえつ  
 て、徳とは美しいものを欲求して獲得することができることである  
 (77b)、と答える。しかるに、美しいものの欲求者は善きものの欲求  
 者である。しかも人間はみな善きものをのぞむ。もし悪しきものを欲  
 求する者があれば、知らずに、すなわち、善きものと思つて、そうする  
 のである。なぜなら、欲求するとは自己のものになることを欲求する

のであるが、悪しきものが自己のものになって、自己が害われ、自己  
 が不幸になることをのぞむ者はないからである。これを要するに、悪  
 しきものを心底よりのぞむ者はないのである。善への意志、幸福への  
 のぞみ—エロース—は万人に共通なのである。したがって、善きもの  
 をのぞむという点では、或る人が他の人よりすぐれているわけではな  
 い。ただ、自己のものにすることができるといふ点ですぐれているの  
 である。したがって、徳とは善きものを獲得する力である(80e)。  
 しかしこの場合も、正しく、または、敬虔に、ということが付け加わ  
 らなければならぬ。もし正しくないならば、善きもの——黄金にせ  
 よ、名誉にせよ——を獲得しないことがのぞましい。獲得には、正し  
 さとか、慎みとか、敬虔とか、そういった徳の部分が付加わらな  
 ければならない。すると徳とは、正しさをもって、すなわち、徳の一部  
 分をもって、善きものを獲得することができることである、というこ  
 とになり、再び徳は多に破碎されてしまう。探究はもう一度始めから  
 やりなおされなければならない。

\* 拙論「パイデアとしてのエロース—ソクラテスによって実証されたる—」  
 (『大谷学報』第三十八卷第三号所載) 四三—四四頁参照。

そこでメノンはソクラテスを譬えて、形相においても、その他の点  
 においても、あの、近づいて触れる者をしびれさせる、痺鱗に酷似  
 している、と言う。「というのは、ほんとうにわたくしは魂も口もし  
 びれて、あなたにどう答えてよいかわからないからです。徳につ  
 いてはわたくしは何度も何度も多くの言葉を、実に多くの人々に向  
 けて、しかも非常に良く語ったと思つていたのですが。ところが今は、  
 それが何であるかを言うことが全然できないのです。」(80a-c)とか  
 れはついに無知を告白する。それに対してソクラテスは、「もし痺鱗

が自らしびれて他をもしびれさせるのであれば、わたしは痺痺に似て  
います。しからざれば違ふ。なぜならわたしは、自分は善く通じてい  
て他の人々を行き詰らせるのではなく、最も自分が行き詰っていて他  
の人々をも行き詰らせるのだから。今も、徳について、何であるかを  
わたしは知らないのです。」(80c-d)と自分も無知を告白したのち、  
「しかるにあなたは、おそろくわたしに触れる前は知っていたのでし  
ようが、今は知らない人に似ています。」と譬え返しておいて、メノ  
ンと共に、徳が何であるかの共同探究にすすんで入ろうとする。

## 二 想 起 (80d—86c)

するとメノンが疑問をさしはさむ。何であるかを全然知らない事柄  
をどうして探究できようか。なぜなら、知らない事柄のどういう点を  
目当にして探究するのか。また、たとえそれに出くわしても、どうし  
てそれが知らなかったところの当のものだと知り得ようか。(80e)。  
するとソクラテスが言うには、それは争論家の言葉である。知ってい  
る事は、知っているがゆえに、探究の必要はないし、また、知らない  
事も探究することはできない、というのは、それは美しい言葉だとは  
思われない。というわけはこうである。神的な事柄に関して知恵ある  
人々——神官や巫女のうちで、自分の携わっている事柄に関して根拠  
を言うことができる人々、及びピンドロスや、その他の神的な詩人た  
ち——の語る言葉によれば、人間の魂は不死であって、ときには果  
て——俗に言えば死に——ときには再び生れるが、決して滅びること  
はなく、何度も生れかわって、此の世の事も冥界の事も、すべての事  
を見て来ているのだから、なに一つ学んでいない事はない。したがっ  
て魂が、徳についてもその他の事についても、前に知っていた事を想  
起することができるのは不思議ではない。余自然は同胞であり、そし

て魂は一切を知っているのだから、一つを想起した——いわゆる学ん  
だ——人が他のすべてを見出すのになんの妨げもない、もしかが勇敢  
で、探究に倦まないならば、なぜなら、探究すること、学ぶことは全て  
想 起 (anamnesis) であるから。<sup>\*</sup>したがって、かの争論家の言葉に順  
ってはならない。なぜなら、その言葉はわたしたちを無為にするであ  
るうし、弱虫には聞くに快いから。これに反して、今の言葉はわたし  
たちを活動的、探究的にする。この言葉を真実なりと信じるから、わ  
たしはあなたと共に、徳の何であるかを探究したいのだ。と。(80e)

\* 「「永遠の生」は超時間的体験であるがゆえに、此の世の延長としてこの  
世と同一平面上にあるべきではないが、この永生の相を表象しようとするば  
わかれは時間的・空間的に想像せざるを得ない。というよりはそうした神  
話的世界として、必然的に永遠の生の体験は同時にわれわれに現れるのであ  
る。」(三井 浩「プラトンにおける愛と死生」〔創立七十周年関西学院大  
学記念論文集所載〕五六二頁)

するとメノンが、いわゆる学びが実際に想起であることを教えて下  
さい、と言うので、ソクラテスは、<sup>ディダクシ</sup> 教<sup>アナムネシス</sup> 教<sup>アナムネシス</sup> 起<sup>アナムネシス</sup> 起<sup>アナムネシス</sup>  
あるのだ、と注意したのち、メノンの奴隷で、まだ幾何学を学んだこ  
とのない少年から、図示しつつただ問いを重ねるだけで、正方形を二  
倍にする知識を引き出すことによって、想起を証明する。その過程は  
三段階に分けられる。先ず始めは少年は、知っていると、刃を  
二倍にすれば事足りると考え、臆面もなくそう答える。次に、一倍半  
と訂正するが、問いただされて行き詰り、無知を覚る。つまり、始め  
は、知っていないのに知っていると思っていたが、今は、知っていな  
いままに、また知っていると思ってもいない。これは想起の階段を一  
段上昇したのであって、少年は今や、知らなかった事柄に関して、よ

り善い状態にあるのである。かれを行き詰らせ、しびれさせて善かったのである。いまや少年は、知らない者として、喜んで探究するであろうから。知ることを焦れて、かくて少年は、ソクラテスに問い正されつつ、もとの正方形の対角線が求むる正方形の辺であることを知るに至る。すなわち、想起したのである。(81e—85b)

そこでソクラテスはメノンに、「おおメノン、どう思われますか。この子が答えた事で、自己<sup>自己</sup>ではないどんな思い<sup>思い</sup>がありますか」。「ありません。自己のです」。「ところが実はこの子は知ってはいなかったのです。少し前にわたしたちが言ったように」。「真実です」。「しかし、この子にそれらの思いが内在していたのです。そうではありませんか」。「そうです」。「したがって、知らない者には、何について知らないにせよ、その知らない事柄について真なる思いが内在しているのです」。「明らかに」。「実に今もこの子に、それらの思いが、まるで夢のように、丁度かきたてられたところなのです。で、もしひとがこの子にしばしばそれらの同じ事をいろいろな仕方であらうならば、ついには誰にも劣らず正確にそれらについて知識するであらうことは確かです」。「そのようです」。「誰も教えず、ただ問うだけなのに、この子は自己の内から知識を自ら取り出して知識するのはありませんか」。「そうです」。「しかるに、自己の内なる知識を自ら取り出すことは想起することではありませんか」。「勿論」。「有るもの『諸存在物』の真理がわたしたちの魂の内に常に在るとするならば、魂は不死でしょう(86a)。したがって、あなたが今ちょうど知識していない事を——すなわち、想起していない事を——勇んで探求し、想起しようと努めるべきではありませんか」。「善く語っておられるように思います。どうしてかは知りませんが」。(85b—86b)

\* 「『メノン』は、認識—学び—理解の可能性をソフィスト的懐疑に対して確保するために、魂の永遠性を利用し、『パイドン』は逆に、「永遠に有る

もの」の認識によって魂の永遠性が保証されていると見る」(Friedlander: *Platon*, II, S. 265)

するとソクラテスは、「実際わたしにも同様に思われます、おおメノン。そして、この言葉のためにわたしは他の点はあまり主張しないでしようけれども、知らない事を探究しなければならぬと思う場合の方が、知識していない事は発見することもできないし探究する必要もないと思う場合よりも、わたしたちはより善く、より勇敢になり、無為でなくなるだろうということ、この点についてはわたしは大いに主張するでしょう、できるならば、言葉によっても行為によっても」。「このこともまたあなたは善く語っておられるように思います、おおソクラテス」。(86b—c)

神話はまた、フリートレンデルの言うように、「夢幻境への横道ではなくして、活動への呼びかけである。これがソクラテス—プラトンのプラグマティズムなのである。」(op. cit. S. 264)

「想起」については、『パイドロス』(219b—c)に次のように語られている。

「実に、未だかつて真理を見たことのない魂はこの形態〔人間〕に入ってきたことはできないのである。なぜかという、人間は語られるものを形相にしたがって理解しなければならぬ。多くの感覚から思惟によって共撰して行つて一となして。しかるにこのことはかのもの——わたしたちの魂がかつて神とともに旅し、今わたしたちが有ると主張しているものを視下して、「真に有るもの」の方へと頭をもたげたときに見た——かのものの想起であるからである。」(三井 浩訳による。三井 浩・金松賢諒訳 プラトン『パイドロス・リュシス・酒宴』(玉川大学版 昭和三四年)六二頁)

なお、この箇所についての訳者注(同書「訳注」一三一—一五頁)を参照されたい。その最後の部分を左に引用しておく。

「この箇所は四九節(86b)の「多くの場所に撤かれているものを二つ

の形相に共働し導くことだ、すなわち対話法 (dialectics) の二面、「分割」 (division) と「綜合」 (synthesis) のうちの「綜合」にあたる。綜合の結果として形相が形成されるのではなくて、却って逆にかかる綜合法は形相によって可能なのである。ただかかる綜合という、感覺的多様に関わる操作を媒介にして形相が自覺されるのである。したがってこれは同時に、「想起」 (anamnesis) という神話的表現になるのである。」

### 三 仮定的方法 (86c—96b)

さて、知らない事柄について探究すべきである、ということが一致承認されたので、徳とは何であるかの共同探究をソクラテスがうながす。しかし、徳が教えられるものかどうか、これを先ず知りたいとメノンがのぞむので、ソクラテスは、あなたは自己が自由になるために自己を支配しようとはせず、却って他を支配しようとする、とメノンの我儘を指摘したのち、幾何学者にならって仮定によって考察することを条件にメノンの意にしたがう。すなわち、幾何学者は、たとえば、矩形を三角形として円に内接せしめることの可能性如何の問題が与えられた場合に、もしその矩形が、円の直径上に置かれたとき、これこれの条件を満たすならば、可能であるが、然らざれば不可能である、というように仮定<sup>ヒュポシタシス</sup>によって、求むる結論<sup>エピゴラシス</sup>の可能、不可能を考察する。それにならって、徳が教えられるか否かの問題も、仮定によって考察するほかはない。徳は何であり、どのようなものであるかか未知なのだから。さて、もし徳が知識のようなものであるならば、それは教えられる——想起される——であろう。そこで、徳は知識であるか、あるいは知識と異ったものであるか、を考察しなければならぬ。(86c—87d)

さて、徳は善きものである、とわれわれは言う。この仮定はわれわれにとって不動である。したがって、もしなにか善きものであつて知

識を離れたものがあるならば、徳は知識ではないかもしれない。しかし、もし知識が包摂しないところの善きものは全く存在しないとすれば、徳は知識であるという仮定は正しいであろう。(87d)

さて、徳によってわれわれは善くなるのである。善きものはすべて有益である。ゆえに徳はまた有益なもの「益するもの」である。ところで、健康、強さ、美しさ、富などは善きもの、有益なものであるが、正しい使用が導く場合にそれらはわれわれを益するのであつて、然らざれば害するのである。また魂に属するもの、すなわち、慎み、正しき、勇敢、聡明、記憶力、大度等の諸徳も、もし知識でないならば、有害である。例えば、勇敢が知慮<sup>ソフィア</sup>ではなく、大胆の如きものであるならば、如何。人間は、理性<sup>ロギス</sup>なしに大胆であるならば、自らを害い、理性と共ならば、益される。慎みも同様である。聡明も然り。理性をもつて学ばれ、整えられる事は有益であるが、理性なしでは有害である。これを要するに、魂のあらゆる努力や忍耐は、知慮が導く場合には幸福に終るが、無知慮が導く場合にはその反対に終るのである。したがつて、徳が魂の内に在るものであつて、有益なものでなければならぬいとすならば、徳は知慮でなければならぬ。魂に属するものはすべて、それだけでは、有益でも有害でもなくして、知慮または無知慮が加わる場合に、有益または有害となるのであるから。したがつて徳は、有益なもの、益するものとして、知慮でなければならぬ。先きに言った富や、その他のものも知慮ある魂の正しき導きによるならば有益となるが、然らざれば有害となる。総じて、人間にとって他のすべてのもは魂に依存し、魂自身に属するものは知慮に依存して善くなるのであるから、善くするもの、「益するもの」は知慮<sup>ソフィア</sup>である。しかるに徳は益する。ゆえに徳は知慮であるか、あるいは知慮の一部分でなければならぬ。(87d—89a)

以上で、もし徳が知識であるならば、という仮定の正しい事が論証



されたわけである。したがって、善き人々は、自然に「生れつき」善くあるのではなく、学び——想起——によって善くなるのである。すなわち、徳は教えられる——想起される——ものである。

しかるに、この結論を得て満足したメノンに対してソクラテスは、徳は知識ではないのではないか、という疑いを表明する。いかなる事柄にせよ、もしそれが教えられるものであるならば、その教師と学生とがいなければならぬ。逆に、その教師も学生もいないような事柄は教えられないものと想像してよいのではなからうか。然り。しかるに、自分は一所懸命探しているのだけれども、徳の教師をどうしても見つけることができない。多くの人々と共に、特にこの事柄について非常に経験が深いと思われる人々と共に探求しているのだけれども。と言って、ソクラテスは、その時ちょうど折よく着席したアニュトスと共に、今度は徳の教師について、かれらが存在するか否か、またどういう人たちか、を探求する。

さて、もしメノンを医者にしたいと思うならば、どういふ教師のところへ送ればよいか。医者のところへではないか。また、もし善き靴屋にしようとするれば、靴屋のところへ送るべきである。とにかく、当の術知テクニクに携わって報酬を受けており、それを学ぼうとのぞむ者に対して自ら教師と称する人々のところへ遣るべきである。ところでメノンは、よつてもって人間が家や国を美しく治め、両親を世話し、同市民や外客を、善き人間にふさわしく送迎し得るところの知恵、または徳を欲求しているのだ、とかねがね言っている。では、かかる徳を得るには、どういふ人々のところへ彼を送ればよいのか。徳の教師と自称して、授業料を取っている人々のところへではないか。すなわち、ソフィストたちのところへではないか。これを聞いてアニュトスは、かれらソフィストは交わる者を傷害し、腐敗させる者だ、と罵り、怒る。しかし、とソクラテスは言う、もし靴屋や服屋が、修繕を頼まれて、

品物を、受け取ったときよりも悪くして、返えしたとするならば、三十日と気付かれずにすむことはないであろう。しかるにソフィストはたとえばプロタゴラスは、自分と交わる者を腐敗させて、受け取った時よりも悪くして返えしておきながら、四十年も気付かれずにいたのだらうか。おまけに、大金持となつたうえ、かれの名声は死後の今に至るまで衰えていない。プロタゴラスのみならず、他のソフィストたちも同様である。しかし、もしかれらが青年たちを欺き傷つけるとするならば、それは知りつつではなく、自分でさえも気付かないのではないか。(89c—92a)

しかしとにかく、いま探求されているのはメノンを悪くするような人々ではなく、かれを徳において語るに足る人間になし得るような人々なのである。では、そういう人々は誰々か、と問われてアニュトスは、一人の名を挙げる必要はない。アテナイ人のうちの美而善なる人々すべてである。と答える。では、かれら美而善なる人々はひとりですらなつたのか。誰からも学ばなかつたのに、その学ばなかつた事を他人に教えることができるのか。それとも、美而善なる先人たちから学んだのか。なるほど、アテナイには政治に関して善き、有益な人々が現にいるし、また過去にもいたけれども、まさかかれらは自己の徳の善き教師であつたのではなからう。これが問題なのである。すなわち、善き人々は、現在の人であれ、過去の人であれ、自己が善くあるゆえんのその徳を他人に授けることを果して知っていたのだろうか。それともそれは人に授け得ず、また他から受け取り得ないものなのか。これがさつきから探究されている問題なのである。(92c—93b)

では、テミстокレスは善き人であつたから、また自己の徳の善き教師でもあり得たであらうか、のぞみさえすれば。しかしかれほどの人が、他の人々が美而善なる人間になることを、しかし特に自分の息子がそうなることを望まなかつたはずはなからう。自己が善くあるゆ

えんのその徳を息子に授けることを惜しむはずはなかるう。しかるにその息子は、善き教師たちに教育されて、馬術その他多くの事において秀でていたけれども、父が善くあり知くあつたところの事柄においてはそうではなかつた。もし徳が教えるものであるならば、テミストクレスは、自己の知くあるゆえんのその知恵においては息子を隣人よりもより善い者にすることができない、という破目に落ちいらなかつたであろうに。アリストイデスやペリクレスやトゥクキデイデスについても同様である。

これを聞いてアニュトスは、「おおソクラテス、あなたは易々と人々を悪く言うようにわたくしには思われます。だから、わたくしはあなたに忠告したい、もしわたくしにしたがう気がおありなら、用心なさるうにと。他国でも多分そうでしょうが、特に此処では、人々に善くするよりも悪くする方がより容易なのですから。しかしあなたは自分で御承知だと思ひます。」と恐迫めいた言葉を吐いたのち、もはや黙して語らない。(93b—95a)

するとソクラテスは、「おおメノン、アニュトスはわたしに怒っているように思われるが、わたしは驚かない。なぜなら、かれは先ず、わたしがこれらの人々を誹謗していると思つており、次に、自分もかれらのうちの一人だと考へているのだから。しかし、悪く言うことがどういうことであるかをもし此の人がいつか知つたならば、怒ることを止めるでしょう。しかし今は知らないのです。」と言つてメノンとの共同探究を再開する。

テッサリアにも美而善なる人々がいるが、かれらは或る時は徳は教えられると言ひ、或る時はそうではないと言ふ。まさに徳の可教性について、かく無定見な人々を徳の教師と言ふことはできない。ではソフィストたちは如何。ゴルギアスは、自らも徳の教師たるたとを約束しないし、他の人たちが約束しているのを聞くと嘲笑する。そして、

弁論において恐るべき人間を作るべきだと思つている。かくの如く、政治家にも、その他の人々にも、或る時は徳は教えられると思われ、或る時は然らずと思われている。のみならず、詩人のテオグニスも同じような事を言つている。すなわち、「汝は善き人々からは善き事を教わるであろう。しかし悪しき人々と交わるならば、現にある理性をも亡すであろう。」と徳を教えられるものとして語つておきながら、他の箇所では、「もし理性が人間に作り得、移入し得るものならば、多くの大いなる報酬を得るであろう、それをなし得る人々は。」と言つて、更に、「善き父から悪しき子は生れなかつたであろう、慎み深い話に聴従して。しかし、教えることによつては汝は悪しき人間を善くなさないであろう。」と同じ事について、今度は自分に反対の事を言つているのである。(95a—96a)

#### 四 知識と正しい思ひ (96b—100c)

したがつて、ソフィストたちも、美而善なる人々も徳の教師ではないならば、他の人々もそうではないことは明らかであろう。しかるに、先きに同意を見たところでは、その教師も学生もいないような事柄は教えられないということであつた。そうすると、徳は教えられないのであろうか。それとも、善き人々が生れるどんな仕方があるのだろうか。

さて、これまでの探究を反省して見ると、滑稽にも次の事が見のがされていたために、善き人々の生ずる仕方がわからなかつたのである。すなわち、人間にとつて行為が正しく善く行われるのはただ知識が導く場合に限るわけではない。幾何学を知らぬ奴隷の少年を正しい解答へと導いたのはかれの魂の内にひそむ「真なる思ひ」であつたように、知識でなければ正しく導くことはできないというわけではな



ったのである。たとえば、テリッサへの道を知っている人が他の人を導くならば、正しく、善く導くことができるのは勿論だが、しかし、その道がどれであるかを正しく思っている人なら、たとえ実地に歩いたことがなく、知識していなくとも、正しく導くことができよう。そうしてかれは、前者が知識を持っている事柄について、正しい思いを持っている限りは、それを知識している者に劣らない尊者であろう、知識してはいないが、真を思っているがゆえに。したがって真なる思いは、行為の正しさに関しては、知識に決して劣らぬ尊者である。それでは、何故に知識の方が正しい思いよりも尊いのか。何によって両者は区別されるのか。(96b—97d)

ダイダロスの作った彫像は、生氣溢るる傑作であるため、繋いでおかないと逃走する。だから、かれの作品のうち、鎖を解かれたものを所有していても、逃亡する奴隷を持っているようなもので、あまり価値がない。これに反して、繋がれているものを持っていることは大いに価値がある。同様に、真なる思いも、手許に留まる間は、美しいものであり、あらゆる善い事をなすとげる。しかし、永くは留まろうとせず、人間の心から逃亡する。したがって、それを原因の思惟によって繋がなければ、大した価値はないのである(98a)。これがすなわち想起なのである。で、ひとたび繋がれると、それは知識となつて常住的となる。このゆえにこそ知識は正しい思いよりも尊いのである。そうして繋ぎによって知識は正しい思いと異なるのである。と言って、無知の知者ソクラテスは、実はしかし自分は、知っている者として言っているのではなく、想像して言っているのだ。しかし正しい思いと知識とは別なものであるということ、このことは決して想像ではなくして、自分の知っていると言える僅かな事柄のうちの一つである。このことわらう。(97d—98b)

\*この「原因」(αἰτία)は、近世科学におけるような意味の原因ではなくして、質料因に対する形相(目的)因(運動因を含む)と解すべきであろう。したがって、究極的には、のちに「国家」において展開されるころの、われわれの存在・認識・実存の根拠たる「超有」としての「善」(τἀγαθόν)または「善のイデア」であると考えられる。

さて、人間が国家にとって善くあり有益であるのは、ただ知識によるだけではなくして、また正しい思いにもよるのである。したがって、先にあげたテミストクレスその他の政治家たちも、アニュトスの言う善良な市民たちも、知恵によって国家を導いたのではない。だからして、他の人々を自分と同じような人間にすることができなかったのである。知識によってそのような者であったのではないのだから。で、知識によってではないとするならば、残るところは良思(「正しい思い」)によってということになる。これを用いて政治家たちは国家を正すのであるが、知識することに関しては神託誦者や占卜者たちとも違わないのである。これらの人々は神来情態(神託)にあって多くの真理を語るけれども、自分の語るところをちっとも知らないのだから。理性を持たないけれども多くの重要な事を正しく言い、かつ行う人々を神的と呼んでもよいとすれば、神託誦者や占卜者や詩人と同様に、これらの政治家たちをも神的で、神来情態にあると言ってもよいであろう。かれらは、正しい偉大な事を言いながら、おのれの言うところを知らず、神に息吹かれ憑かれているのであるから。(98c—99a)

これを要するに、徳は自然に「生れつき」具わるものでもなく、教ええられるものでもなくして、神的運命(Daimoniac)によって、理性なしに、具わるのであろう、具わる人に(99e)。尤も、他を善き政治家となし得るような人がおれば、別であるが。その場合には徳は教えられる——想起される——ものである。もしそういう人がおるなら

ば、その人は生者の間にあって、死者の間にあるテイレンシアスに比せられるであろう。ホメロスはテイレンシアスについて、「冥界にある者のうち彼のみ生氣あり、他の者らは迷う影。」と言っているが、此の世においても同じであって、今言ったような人は、徳に関して、群影の中の実物であろう。<sup>\*</sup>(99e-100a)

<sup>\*</sup> 『酒宴』212a (前掲拙訳書二四三頁) 参照。

「しかし、どういう仕方でも徳が人間に具わるかを探究する前に、先ず、徳そのものがいったい何であるかを探究しようと努めるとき、徳について明確なことをわたしたちは知り得るでしょう。」とソクラテスは、メノンにその功利的な探究態度の反省をうながしたのち、「しかし今はわたしは或る所へ行かなければならない時間です。で、あなたは、自ら納得したこの同じ事を宿主たるこのアニュトスにも説得しなさい。かれがもっとおとなしくなるように。なぜなら、もしあなたがこの人を説得したならば、アテナイ人たちにも益するところがあるでしょうから。」と友としてメノンに対し、早速徳育への参加を頼んで、この対話編は終わっている。

さて、当編を振りかえって見ると、先ず、想起としての知において、すなわち、自己の超時間的・永遠的根源からの知識の産出としての自知において、『カルミデス』の自知が深化され、根拠づけられているのを見ることができると思う。『カルミデス』においては、自知と善の知との一致はただ暗示されているにすぎなかった。しかるに当編においては、知識は想起として、自己の内奥にある「有るもの」の真理<sup>(96b)</sup>の自知であると同時に、「原因の思惟」<sup>(98a)</sup>として、われわれの存在・認識・実存の根拠たる「善」の知であるから、「自知」と「善の知」とは一致することになる。しかして「善」

を、『テイマイオス』<sup>(80d-80a)</sup>の言葉にしたがって、もし「神」と呼ぶならば、自知とは即ち神知——神を知ること——に他ならないであろう。さらに、かかる根本知から一切の具体的認識が展開するのであるから、『カルミデス』で要請されていた、善の知と対象知との一致も可能となり、自知と善の知と対象知との三者は一致することになる。徳とはかかる意味の知識に他ならない。自己の自然・本然に帰った、真に神<sup>ス</sup>的<sup>な</sup>知恵と言うことができよう。しかるに、「原因」の自覚を欠くならば、善の知と対象知——いずれも、もはや知とは言えない——との結合は「神<sup>ス</sup>的<sup>な</sup>運命」によると考えるより他なかるう。

<sup>\*</sup> Vgl. Zeller : *Die Philosophie der Griechen*. II Teil I Abt. S. 707  
—718

次に、想起説と共に、学と教との概念が根本的に変革されている。すなわち、学ぶとは想起することであり、教えるとは想起へと導くことである。教と学とのかかる新概念の前提のもとに、徳は教え得られ、学び得られるのである。

かくの如く、教えるとは自証への目覚ましであるならば、而して、この覚醒への唯一最善の方法はソクラテス的対話法<sup>ダイアレクティック</sup>であるならば、徳の教師は真の愛知者(無知の知者)以外にはなく、ソフィストや政治家等は、対話法を行うことができないゆえに、徳の教師ではあり得ない。徳が知慮——自知(想起)——である限り、徳育は対話法による想起の修練として可能であるが、これに反して、世間普通の市民的・政治家的徳は、知慮にではなく、正しい思いに基づくのであるから、人間的教え乃至修練によっては得られるのではなく、神<sup>ス</sup>的<sup>な</sup>運命によって与えられるのである。

しかし、理性<sup>ノエマ</sup>を欠く市民的徳といえども没価値とは言えない。それ

は影にすぎない。しかし常に真徳の影なのである。ゆえに、それは時に応じて最大の事をさえなしとげるのである。自証を欠くゆえに、むしろ永続性を持たないけれども、各人の内にひそむ、善の予感、真なる思いは、靈感の瞬間に突如魂の奥底から現れ出て、偉大な徳行をなしとげるのである。

しかし自知即神知としての真徳こそ、自己の使命即神命を自覚せるゆえに、真の意味で神的運命ダイモニアの実現者であろう。

以上述べた考えは他の対話編を援用しての私見にすぎないが、なお、ディアレクティケーとテイア・モイラとの関係を究明しなければならぬと思う。